

末黒野

すくろの

10月号 (通巻866号)



ひた灼けて

尋ねられ団扇忙しくなりにけり
島風や海人のほまちの早畑
破れても掬ふ箱釣をんなの子
風の音川の音絶え日の盛
港灼け終着駅は始発駅
炎天や万籟絶ゆる住宅地
児童遊園ジャングルジムのひた灼けて
自衛艦旗降納喇叭合歓咲きて

松本三千夫

(名譽主宰)

遊び舟

黒滝志麻子

果てしなくうねりの大地薯の花
紫蘇つむや津軽言葉の客ひとり
まさぐりて取りつくしたる茗荷かな
産土に星のこぞれり夏祭
片蔭の肩寄せ合へる老夫婦
みんなんの夕餉せかせり峡の村
水音の水にしたがふ白日傘
夕焼に染まりて広き川となり
一湾の夕日惜しめり遊び舟
薔薇園の使者のごとくに鳩発てり
したたかに草また根付く土用かな
炎天の砂利の置かるる捨田かな

朝曇

森清堯

ゆりの木の花旧道の陰を濃く
日雷風樹にこもる鳥の数
雲厚し泰山木の花の鏘
紫陽花や庭向く席の緋毛氈
梅雨曇園の芝刈る重き音
音読の後の黙読レモン水
骨折の妻の摺り足百日紅
白南風や浦の蓑を艶めかせ
見廻りのやうに庭に来夏の蝶
朝曇園の鴉の喧し
青芒風の起伏の生まれけり
郭公や富士を真面の深呼吸

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

大夕焼

岡野里子

空港を出づる一步の溽暑かな
碧天やブーゲンビリアの分離帯
延々と椰子の畑や雲の峰
スコールの磨ぎたる空や夕日燃え
夕焼の海へ迫り出す露店かな
飲み干すやグラスに残る大夕焼
天を地を人を一つや大夕焼
夏満月椰子の葉並のてらとらと
七色の光ゆらゆら夜のプール
聳え立つ白きモスクや夏の雲

水芭蕉

田中臥石

青葉透く窓や網戸の雨零
暑き日の熱き珈琲喉通す
わが顔に胡坐かく鼻汗しとど
招客のひとりや宵の海老鮑
蛸見に来てをり上総一の宮
深呼吸して見る沼の水芭蕉
水芭蕉抽き出してゐる渡り板
ふるさとの匂ひの池や不如帰
葉裏より宵の蛸を手を掬ふ
老鶯や誘ひ出されて池巡る



皐月波

森清信子

鉄橋の跨ぐ植田や富士真近
雨脚の音を吸ひたり桐の花
名ある橋名のなき橋や七変化
鈍色の沖のとばりや皐月波
くつきりと馬の鼻筋梅雨夕焼
えご散るや崖の吊橋音鏝びて
万緑に沈む湖遊覧船
単線の鉄橋長し栃の花
鉤の手に二世帯住まひ燕の子
骨折の齒痒き暮し戻り梅雨

河鹿笛

安齋久英

噴水や旗艦三笠の常しなへ
夏至暮るる宵の明星うす薄と
基地の空暮色漂ひほととぎす
手の平に雨後の雫や七変化
海峡をゆるり出船や戻り梅雨
夏雲や北斎の波立ち上がる
鈍色の雲脚沖へ戻り梅雨
降りやみのせはしき一日ほととぎす
梅雨寒や校舎は昼を灯ともして
人去りてひときは高し河鹿笛

漁 火

石 黒 興 平

螢火や闇の起伏に従ひて
梅雨冷や眼鏡にうすき指紋跡
梅雨明の水ひかりたる魚梯かな
久々のふるさとの風夏座敷
甚平や父母の齡をとうに過ぎ
見るだけと見すかされをり夜店の灯
賑はひの蔵の街並夏燕
夏暁や露天湯すでに人の声
漁火の星に連なる涼しさよ
焼鮎の反り身を照らす熾火かな



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



基地 小田嶋野笛

ででむしや無一物でもなき余生
半夏生夫の裏側いまも謎
上げ板のいつまで隠す梅酒かな
蚊遣豚のはらわたとなる刻の渦
万葉仮名の辞世のごとく蚯蚓の死
草茂る基地といふ字の墓地に似て
子の知らぬ貯へ僅か小判草

方位盤 岡田史女

海蝕の千畳敷や花うばら
晶々と夏雲ぬぎぬ芙蓉峰
夏雲や魚のさ走る潮溜り
海光をまとひて百合のひらくかな
炎昼の海へ向きをり方位盤
しろじろと灼けてゐるなり倉庫群
炎天の波へ傾け入るタグボート

花梯 梧 加藤静江

灯台の白際立ちぬ花梯梧
海の紺いよよ深まる梅雨晴間
万緑の暗き静寂や切通し
古民家の絶やさぬ燻し梅雨深み
翠巒やダム放水に虹生まれ
古民家の土間つやつやと小玉葱
脚長き少女横切る日の盛り

青炎集

黒滝志麻子選



横浜 小倉 純

半刻の美しき落暉や夏至の夕
ほととぎす開発止めの叫びとも

青胡桃青空見せて抜くる風
十薬を活くる水盤絵画展

上弦の長庚供や梅雨晴間

梅雨寒の大阪の地震友見舞ふ

横浜 外山 節子

野仏へ通せん坊や梅雨ぎのこ
梶子の純白錆びてより親し

梅雨明の犬に引かるる散歩かな
暑きこと言はぬと決めて尚暑し

目礼の目が語りをる暑さかな
岩清水十指に汲みて痺れけり

横浜 土田 亮

遣り水に蜥蜴隠るる葉裏かな
老鶯の声絶え間なし三浦墓地

釣橋に身をひるがへす岩燕

夏霧の山裾覆ひ露天風呂

旅馴るる頃は帰りや梅雨湯宿

海人達のもみ合ふ渚荒神輿

横浜 福澤 聡子

斑猫や久し振りなる父母の墓
塩飴を味方にしのが炎暑かな

黄ばかりの睡蓮分くる鯉の口

初生りの瓜刻む香や朝の卓

故郷の風を添へたる夏料理

電灯を消す公園へ蛍狩

横 浜 小 池 み な

空梅雨と思へば今日の湿りかな

蕺菜の匂ひの包む庭手入れ

絵羽織を着たるごとくに錦鯉

緑蔭の並木の道やバス窓

缶ビール一本分けて嫁姑

さまざまに形を連ね雲の峰

横 浜 和 田 慈 子

地震に覚む朝焼空のくれなゐに

白波の洗ふ礁や日の盛

横縞のシャツ翻り子の帰省

水亭の古りし蠶や牛蛙

夕映えの刻惜しみつつサーファーら

梅雨明くる富士の雲脱ぐ青さかな

横 須 賀 福 田 禎 子

朱の褪する八脚門や蓮の寺

海風の通ふ欄古代蓮

大寺の蓮の浄土の甦る

船頭の塩辛声や梅雨晴間

水底に己が影引く水馬

揚羽蝶三尊五祖の庭に舞ふ

横 浜 新 井 八 重 子

目溢しの葉裏の実梅紅の尻

老鶯や暮近き空響かせて

小さき花に止まるや発てる夏の蝶

応援の揃ふ団扇や体育館

色に惹かれ名に諾へり花魁草

昼下りの人声跡絶へ蟬時雨

横 浜 前 川 美 智 子

尼寺や雨に打たるる花擬宝珠

海風の抜くるや夏至のテラス席

梅雨の蝶陰より出でて陰に消ゆ

ばさばさと庭師の鋏梅雨明くる

離れ家や竹林洩るる灯の涼し

六十路越す教へ子来たり水羊羹

横 浜 山 本 茂 子

梅雨晴間ぶらりなじみの珈琲店

咲き満ちて裏木戸塞ぐ日照草

老竹に寄り添ふやうに今年竹

寿司桶にどつぷり浸る冷素麺

茄子漬や健康守る塩加減

葉隠れや薄紅さして茗荷の子

耕 土 集

森清 堯選



梅雨晴間窓開け放つ部活部屋
木道に挨拶はつむ山開き

横浜 渡辺美智子

水を打つ恙無き日を締めくくり

サングラス外すや肩の力抜け

朝焼や瀬戸の島々浮かびたる

小さき手の握る未来や柏餅

横浜 池乗恵美子

更衣、心許なき夫の背

奥の間に立たされてをり竹婦人

水やうかん喉を通れば空青し

見返れば参道長し若葉風

雨音に目覚むる朝や梅雨の入り

横浜 友田 悠子

記念碑を撫つる皺の手沖縄忌

山桜桃小瓶に映ゆるジャムの色

飛魚の光るしづきや船の旅

水の星の定めとは言へ夏出水

いそいそと向かふ古書市梅雨晴間
つれづれに手沢本閉ぢ水羊羹
いま老けり背中まるめて酌む冷酒

横浜 櫻本 武志

閑適や蟬声まばら日は斜め

バラードの哀調帯びぬ野馬祭

花あやめ嫁人舟の発つ渡し

横浜 中野 大樹

大粒の枇杷の三つや子の土産

静けさを童乱舞のほしいまま

大沼に小舟傾かせ尊採

子ら並び競ふ水切り夏の川

鐘の鳴り暮れゆく奈良や柿若葉

横浜 和田 啓

富士望む霊園広し濃紫陽花

遠青嶺飛行機雲の天へ伸び

夏薊仔犬の戯るるドッグラン

額縁は宿の大窓五月富士

冷蔵庫

小川 玉泉

(名誉顧問)

梅雨晴れ間屋根の雀の賑にぎし
餌を求め守宮はりつく厨窓
尾の先を池面へさつと初とんぼ
水補給命の綱の冷蔵庫
玄関の真つ正面や大西日
夕蟬の声弱々し直ぐに止む

雑記帳 15

またしても天災が西日本を襲った。高齢者には特に厳しい災害である。加えて未曾有の暑さである。地球を取り巻く宇宙の広さをしみじみ思う今日この頃である。